第八回

東北お遍路俳句コンテスト

夏井 いつき 氏 選評

天 みちのくの鬼は海から鬼やらひ

曾根 新五郎（東京都練馬区）

「みちのくの鬼は海から」に喚起されるあの日の海は鬼の形相をして迫ってきますが、やがて踏み固められた静かな雪道の映像に重なってゆきます。東北の節分は寒さ厳しく、赤鬼青鬼を怖がる子の涙も氷る冷え込みでしょう。二度と恐ろしい鬼を招き入れぬよう、力強く豆を打つ人の姿が浮かんでくるようです。

地 春の星十四年目の海覆ふ

伊藤 弘子（福島県いわき市）

東日本大震災の停電の夜は、夜空を覆う春の星は、せつないほど美しく見えたことでしょう。以来、復興に向かう十四年、どんな思いで空を仰ぎ、星を見つめてこられたことか。魂のごとくいきいきと輝き、涙のごとくしみじみと潤む春の星がいま、海を癒すかように覆っているのでしょう。

人 風の電話の重き受話器や夏日影

伊藤 恵美（岩手県盛岡市）

東日本大震災の後、岩手県に設置された「風の電話」は、電話線がつながっていないダイヤル式の黒電話です。誰もが自由に使えるこの電話で、亡き人に想いを伝えようと沢山の人が訪れるようです。電話ボックスに注ぐ夏の日差しが、手に取った受話器を益々重く感じさせます。

万緑や魚のにほひのなき入り江

二階堂 光江（岩手県盛岡市）

三陸沿岸域の海底生態系に大きな影響を及ぼしたという東日本大震災の大津波。「魚のにほひのなき入り江」には深く胸を衝かれます。しばらくは「魚のにほひ」もなく、生き物の気配もなかったのでしょう。魚たちが戻って漁業が復興する希望も、「万緑」の季語に託されているようです。

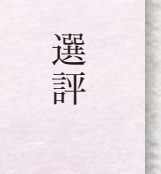
おみくじの吉凶吹かれ鵙の声

安達 広子（岩手県盛岡市）

東北お遍路の巡礼地のお寺か神社でしょう。括られたおみくじが風に吹かれています。吉も凶も混在するおみくじは、様々な人々の運命の象徴のようでもあります。境内に響きわたる鋭い鵙の高鳴き。中七のこの位置におかれた「吹かれ」という措辞が、前後を効果的に結んだ作品です。

入選

鳥雲へ海を恐れし日のありき　小見 伸雄（滋賀県大津市）
引き潮はしづか声帯かはる夏　野村彩斗（愛知県安城市）
ゆるぎなく雪は降り積む蒲生干潟　野崎眞奈美（兵庫県宝塚市）
滴るを追へば河童の國らしき　池之端モルト（千葉県市川市）
町変はれど地霊はいまも飛蝗飛ぶ　大信田宏子（岩手県盛岡市）
ちちろ鳴くここは書斎のありし場所　及川智子（岩手県盛岡市）
夏の雨瓦礫の山の鯨舘　福士直美（岩手県山田町）
生き生きと浜昼顔の砂を吐く　須藤進乃助（熊本県熊本市）
生家まで春泥を行くほかはなし　古川制子（岩手県盛岡市）
遍路笠日ごとに軽し雁渡る　井上昌子（大阪府堺市）



永瀬 十悟 氏 選評

天 慰霊碑の一人ひとりの名に秋日

大信田 宏子（岩手県盛岡市）

東日本大震災では多くの人が亡くなった。その一人一人には名前がある。人は数ではなく、名前で呼ばれることでその人たりえる。それは亡くなった後も変わらず、名前はその人を偲ぶよすがとなる。慰霊碑に刻まれている名前を、柔らかな秋の日差しが一人一人の命の重みを包み込むように照らし、犠牲者を悼む心と響き合う。

地 夏空や除染土の下に父の骨

渡辺 ヒロ子（福島県富岡町）

原発事故で汚染された土地への除染作業が進む中、その除染土の中間貯蔵地となった区域がある。その地に父の墓があるのだろうか。たとえ改葬されたとしても、父祖代々の故郷を失った悲しみは消えない。広がる夏空は希望や再生を感じさせつつも、原発事故の爪痕がいまだ残る現実を映し出している。失われたものの大きさが胸に迫る。

人 核という棘が刺さったまま初日

堀 卓（千葉県松戸市）

原発事故は、放射性物質の飛散や多くの住民の避難など多大な影響を及ぼした。刺さった「棘」は核の危険性を象徴し、いまだ癒えない傷を示す。「まま」には今も続く不安や葛藤がにじむ。新たな年を迎える象徴の「初日」に、困難の中にも再生への希望を込める。災害を過去のものとせず、伝え続けることが未来への警鐘となる。

冷やされて尻尾よろこぶ被曝牛

髙市 宏（福島県郡山市）

夏の暑さの中、水に冷やされる牛の姿が描かれている。しかし、この牛は東日本大震災の原発事故で被曝した運命を背負っている。尻尾を揺らす仕草には一瞬の喜びがあるが、その背後には重い現実が潜む。被曝牛を殺処分せず、育て続ける牛飼の覚悟と慈しみが背景にある。原発事故の影響は、人間だけでなく他の命にも及んでいる。

仮設から続く句会や遠花火

高橋 かおる（宮城県大崎市）

震災で被災し、仮設住宅での暮らしを余儀なくされた人たち。そこで始まった俳句会が今も続いているという。遠くから見る花火は、仮設住宅での厳しい日々の中、俳句が心の支えとなったことを思い起こさせる。助け合いながら歩んできた道のりを振り返ると、復興は目に見えるものだけでなく、心の再生も重要であると気づかされる。

入選

被曝牛飼育の漢寒の月　鳴海 浅葱（愛知県武豊町）
かげろうや遺構だけ見て何わかる　横山 光幸（福島県郡山市）
はまなすの移植十年被災浜　西山 逢美（福島県いわき市）
夜の森を浄化するごと飛花落花　高橋 さとか（宮城県仙台市）
流された獅子頭今神楽舞う　青沼 芽吹（宮城県大崎市）
除染後の白き庭先百合が咲く　鈴木 崇之（宮城県仙台市）
みちのくの一木一草風光る　曽根 新五郎（東京都練馬区）
仮設跡の今を書き添へ花便り　茂木 佐貴子（福島県福島市）
取り出した核何処へと狸啼く　大渕 航（新潟県小千谷市）
被災地に夏連れてくるリアス線　中村 恵如（岩手県盛岡市）

コンテストが被災地を巡る

東北お遍路俳句コンテストの礎を築いてくださった黒田杏子先生が亡くなり、早2年が経とうとしています。部内で黒田先生に代わる選者を話し合い、「東北の被災3県の俳人の方々で1年ごとの持ち回りに」ということに。そうすることで各県に当コンテストが認知される機会になると考えました。そこで昨年度は宮城県の渡辺誠一郎先生（小熊座）に、そして今年度は福島県の永瀬十悟先生となりました。

永瀬先生は福島県須賀川市出身で、俳句同人誌「桔槔（きっこう）」同人会会長。東日本大震災と福島第一原発事故の福島県を詠んだ「ふくしま」五十句で『第57回角川俳句賞』受賞。須賀川市の「松明あかし」や「牡丹焚火」を俳句に詠む活動もなさっています。黒田先生の一周忌の集いではじめてお目にかかりましたが、かつて医療製品会社の技術者でいらしたそうで、大変スマートなお方です。俳人や俳句関係の方々を大勢ご紹介、当コンテストを宣伝する機会を頂きました。

なお、2025年度は第5句集「龍宮」で第68回現代俳句協会特別賞を受賞の岩手県の照井翠先生に選者をお願いできました。小さな俳句コンテストを皆様に暖かく育てていただき心より感謝申し上げます。（東北お遍路プロジェクト代表・新妻香織）

選外作品五十句

アメリカへ旅せし鳥居海猫の島　西 鯖男（青森県青森市）
秋津飛ぶ潮の香のせぬ防潮堤　片倉 恒子（岩手県盛岡市）
避難所の毛布も一緒卒業歌　佐々木 みちる（岩手県盛岡市）
番号のなき風の電話や秋の蝶　阿部 ゆき子（岩手県盛岡市）
遍路道耳を澄ませば波の音　藤本 千二（岩手県一関市）
巡礼の行く野の道の彼岸花　岸 浩子（岩手県陸前高田市）
凍星や闇を受け止め防潮堤　青木 由美子（宮城県大和町）
雪帽子ふっくり丸い遍路道　末永 栄子（宮城県塩釜市）
荒浜の枝豆の畑碁盤の目　石原 晴次（宮城県仙台市）
歩ひても歩ひてもまだ三月　針生 きよみ（宮城県仙台市）
津波疵（きず）いえて港の木槿（むくげ）かな　佐藤 広和（宮城県仙台市）
大島や海火事逃れ咲く椿　海老沢 法導（宮城県仙台市）
フクイチを背にヒマワリの頸太し　川名 まこと（宮城県仙台市）
無伴奏のチェロや十一日の朝　島 文庫（宮城県仙台市）
津波禍の慰霊の旅よ雲の峰　小野 トメヨ（福島県新地町）
浪静か慰霊碑集う入彼岸　荒 拓見（福島県新地町）
久方に会えて大聖寺盆最中　根本 洋子（福島県相馬市）
人賑わう鎮魂の浜盆踊り　吉田 和子（福島県相馬市）
鍬の土つけて黙祷震災忌　齋藤 正道（福島県伊達市）
忘れ去られしデブリ雪の包装紙　横山 ひろこ（福島県福島市）
鳥雲に入り三鉄の車窓かな　柳沼 弘（福島県郡山市）
夜ノ森の桜よ私元気です　佐藤 秀治（福島県須賀川市）
麻痺の身の我に白南風入れてくれ　三瓶 紀子（福島県須賀川市）
富岡の桜並木や心の灯　伊東 地肌（福島県須賀川市）
盆飾りなき浜のじゃんがら津波跡　矢内 あけみ（福島県いわき市）
たがえずに桜は咲けり津波の地　久信田 史夫（茨城県水戸市）
被災地より焼きそばやさん大西日　鈴木 美江子（栃木県那須烏山市）
秋うらら被災犬らの里親に　遠藤 幸子（群馬県高崎市）
東北に芭蕉追ひ駆け秋遍路　松下 弘美（埼玉県東松山市）
お遍路の杖休ませる青葉風　吉田 春代（埼玉県行田市）
蜻蛉と吾ひとつ石かりひと休み　吉村 りつ子（千葉県柏市）
はだれ野や潮騒を聞く墓所の径　松田 なごみ（千葉県千葉市）
初つばめ終の棲家のはずだった　須賀 毅（千葉県我孫子市）
原発の長き廃炉よ凍雲よ　田中 正博（東京都足立区）
金剛杖しがみつきたる枯螳螂　松蔭 眞由美（東京都江戸川区）
俳聖も一緒に歩む遍路道　小林 和子（東京都練馬区）
福島の空真つ青や冷奴　森川 雅美（東京都杉並区）
盆祭おかえり海も星も風も　山倉 さ実（東京都日野市）
新しき顔の街結ぶ雪の道　下村 修（神奈川県川崎市）
腕の蚊を叩けぬままに遍路道　岡田 弘子（神奈川県横浜市）
槌音のひとつひとつに秋深む　竹澤 聡（神奈川県横浜市）
納経に亡き名を添えて遍路道　阿部 文彦（神奈川県横須賀市）
みな土に還るといえど陽炎へり　井上 靖（神奈川県小田原市）
みちのくや遍路のごとく蟻の列　村田 一広（山梨県甲府市）
錆臭の西風たろう観光ホテル　小林 琢二（愛知県小牧市）
投句することは鎮魂飛花落花　斉藤 浩美（愛知県東海市）
面上げむケルン貫く春日影　満保 千里（富山県高岡市）
集落は姿もうせて御刀神社　上田 俊朗（石川県小松市）
地番では我が家炎暑の造成地　久保 哲也（愛媛県松山市）
新しき街見つけたる遍路かな　明照 彬吾（愛媛県松山市）

〈 第9回東北お遍路俳句コンテスト作品募集！ 〉 ■ **題**：自由題、ただし東日本大震災の被災地を思う俳句　■ **応募期間**：2025年9月30日（消印有効）　▶**作品の送り先**：〒976-0022 福島県相馬市尾浜字南ノ入241-3　東北お遍路コンテスト係

【 東北お遍路俳句・写真コンテスト賞品当選者 】
● **被災地うまいもの1万円分（2名）** 俳句の部：曽根新五郎様／写真の部：村上淳様
● **被災地うまいもの5千円分（4名）** 俳句の部：大信田宏子様、伊藤弘子様／写真の部：山下春樹様、小檜山裕行様
● **被災地うまいもの千円分（20名）** 俳句の部：伊藤恵美様、二階堂光江様、安達広子様、小見伸雄様、野村彩斗様、渡辺ヒロ子様、堀卓様、髙市宏様、高橋かおる様、鳴海浅葱様／写真の部：鴫原さとこ様、西山栄様、岸浩子様、門林泰志郎様、佐々木均様、吉田真一様、八木充幸様、小曾根蒼様、守屋正安様、高橋達也様

俳句は東北お遍路プロジェクトHPからもご応募可能です。